

Title	ジョルジュ・サンドとポーリーヌ・ヴィアルド： 「往復書簡」にみる音楽と文学の融合
Sub Title	George Sand et Pauline Viardot : entre musique et littérature, un lien étroit décelé au fil de leur correspondance
Author	西尾, 治子(Nishio, Haruko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.60 (2015. 3) ,p.29- 52
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Mélanges offerts au professeur Suzuki Junji et au professeur Hayashi Emiko = 鈴木順二教授・林栄美子教授退職記念論文集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20150331-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジョルジュ・サンドとポリーヌ・ヴィアルド 「往復書簡」にみる音楽と文学の融合

西 尾 治 子

はじめに

19世紀フランス最大の天才女性音楽家と称されるポリーヌ・ヴィアルド¹⁾ (1821–1910) が作家ジョルジュ・サンド (1804–1876) と同時代に生き、二人が緊密な交友関係をもっていたことは、日本では殆ど知られていない。しかしながら、作家と音楽家の間で培われた36年に及ぶ友情は、音楽家あるいは作家として最高の理想を目指す創造者という共通項を基盤として築かれた堅固なものであった。二人は女性同士の私的で日常的な友情に甘んじたのみだったのだろうか。文学と音楽のスペシャリストは、それぞれの専門が何らかの形で関連し合う創作なり作品を企図することはなかったのだろうか。もしあったとすれば、それは例えば文学と音楽の融合を目的とするようなものだったのではないだろうか。本稿ではこれらの問題提起の解明のために、ジョルジュ・サンドとポリーヌ・ヴィアルドの往復書簡 (1839年から1876年)、ポリーヌ・ヴィアルドの各種評伝²⁾、さらに本稿の執筆者が独自に作成

1) 本名はポリーヌ = ミッシェル = フェルナンド・ヴィアルド Pauline-Michèle-Ferdinande Garcia

2) ジョルジュ・サンドとポリーヌ・ヴィアルドに関する代表的な研究としては、サンドの書簡を綿密に調べ上げたロシア人研究者のウラジミール・カレニンによるサンドの伝記全四巻、ジョルジュ・サンドとポリーヌ・ヴィアルド往復書簡 (10年間に限定したもの) を初めて編纂したテレーズ・マリックス = スピールの『ジョルジュ・サンドとポリーヌ・ヴィアルド 1839年～1849年』

した二人の略年譜をおもな参考データとして、知られざるポリヌ・ヴィアルドの人物像に迫り、サンドが彼女とともに企図した文学と音楽の融合の軌跡を考察する。

I. ポリヌ・ヴィアルド

I.1. ポリヌの生い立ち：音楽一家のガルシア家

ポリヌ・ヴィアルドは、ジョルジュ・サンドを嚆矢とし、文学者バルザック、ミュッセ、ゴーチエやツルゲーネフ、あるいは、リスト、ショパン、ベルリオーズ、マイヤベーア、クララ・シューマン、グノー、ドラクロワといった芸術家たちがこぞって心酔し、敬愛したオペラ歌手であり女性作曲家であった。まず初めに、ポリヌ・ヴィアルドがどのようにして当時の文学者や芸術家たちのマドンナとなり得たのかを知るために、その生い立ちを探ってみたい。

ポリヌ = ミッシェル = フェルナンド・ガルシアは、1821年7月18日、パリのリシュリユー通りに生まれた。

父親のマヌエル・ガルシアは、スペインで著名なテノールのオペラ歌手だった。彼が歌うドン・ジュアンは、誰にも真似ができないと噂されるほど見事だったといわれる。音楽一家の当主マヌエルは、スペイン流の荒々しく力強い歌唱法を守り、子供達に徹底して厳格なスパルタ式音楽教育を授けた。長女マリアが17歳で、突然、29歳も年上の銀行家マリブランと結婚したのは、ひとえに軍隊式スパルタ教育一辺倒に徹した専制君主的な父親のもとか

年』および『ジョルジュ・サンドとロマン主義音楽』、ジョルジュ・リュエバンの『ジョルジュ・サンド書簡集』全26巻、ティエリー・ボダンの『サンド書簡集補追版』、ポリヌの伝記関連については、ニコル・バリ、パトリック・バルビエの『ポリヌ・ヴィアルド』、イワン・ツルゲーネフ、ポリヌ・ヴィアルドおよびマリア・マリブラン研究会が刊行した『手帳 イワン・ツルゲーネフ ポリヌ・ヴィアルド マリア・マリブラン』といった諸研究を挙げることができるだろう。

ら逃れるためであったといわれている³⁾。一方、妹のポーリーヌは、まだ父の方法を学ぶ年齢ではなかったため、イギリス、アメリカ合衆国、メキシコを巡業する家族について廻っていただけだったが、一家は地方から地方へと世界各地を巡業し、到る所で成功を取めた。

メキシコでは、旅馬車で移動中に、60名の覆面盗賊の襲撃を受けたことがあった。隠し持っていた金銀の延べ棒から衣装まで奪われる災難に遭っても、マヌエルは、底抜けに明るく、全員が怪我もなく命が助かったことを喜び、他の旅行者たちと夜更けまで歌い、皆で合唱した。家族全員がスペイン的情熱の塊のような一家であった⁴⁾。ポーリーヌは後になって、このときの経験を音楽的な感性で捉え「マスケット銃の爆音、賊が斧で木箱を割り裂く音、山に囲まれた溪谷に吹きすさぶ風の轟音」「恐怖で歯がガチガチと鳴り震えていたのに、すべてが恐ろしいまでに美しく、それが私はうれしかった」と回想している⁵⁾。

ポーリーヌの述懐は彼女が他の家族同様にロマン主義的な熱情の持ち主だったことを示しているが、ポーリーヌのそれは血気盛んな外向的開放性というより、裡に秘めた内在的なもので、それだけに強靱なものであったと推測される。

一家で第二帝政下のパリにやってきた時、父親のマヌエル・ガルシアはフランス語を一言も話せなかったが、天賦の才と物腰のよさで、当時のイタリア座の経営者ベルトンに認められ、運が開けた。母親ヨアシナも結婚前はス

3) Cf. Nicole Barry, *Pauline Viardot L'égérie de George Sand et de Tourgueniev*, Flammarion, 1990, p. 18.

4) ジョルジュ・サンドの『歌姫コンスエロ』に描かれている、ボヘミアの百姓女が盗賊一味に襲われその女性の夫が連れ去られる逼迫した暴力と抗争の場面は、このポーリーヌの話にヒントを得ているものと推測される。ジョルジュ・サンド『歌姫コンスエロ』(下)持田明子・大野一道監訳 藤原書店 2008 pp. 897-904. また、この小説の後半では、ヒロインのコンスエロがマリー・アントワネットの母マリア・テレジアの宮廷で歌う場面が描かれている。歴史上の時間軸はズレているとはいえ、この場面はオーストリアやドイツの宮廷の皇帝の前でオペラを披露したポーリーヌ・ヴィアルドの姿を彷彿とさせる。

5) Nicole Barry, *op.cit.*, pp. 21-22.

ペインの舞台に立つ歌い手であったし、さらに姉のマリアはといえば、ニューヨークやロンドン、パリのオペラ座で衆人の耳目を集めた、かの有名な美人歌手マリア・マリブランであった。マリアに魅了された芸術家は、ロッシーニ、ショパン、メンデルスゾーン、リスト、グノーなど多くを数えるが、ジョルジュ・サンドも例外ではなかった。サンドは1831年に、実際にマリアの舞台を見て強いインスピレーションを受けている。女優がヒロインの小説『ローズとブランシュ』はサンドと当時の恋人ジュール・サンドオとの共作だが、この長編小説はマリア・マリブランにインスピレーションを得て誕生したものであることを指摘しておこう⁶⁾。

長兄のマヌエルは、1832年に父親が他界すると、その後を継ぎ、音楽書『歌唱技法』を出版している。このように、ガルシア家は、リストに「才能が遺伝する家族」と言わしめたほど、家族ぐるみの音楽一家であった⁷⁾。

1.2. リストの教訓とオペラ歌手デビュー

音楽一家に生まれたポリーヌは、15歳になってピアノのレッスンを始める。ところが、彼女が師事したのは、ほかならぬピアノの巨匠フランツ・リストであった。「端正な顔立ち。引き締まった口元。厳かで、強い意志を感じさせる眼差し。深く吸い込まれるような瞳。」「ピアノに向かえば圧倒的な超絶技巧と、夢見るような甘い旋律に誰もが息をのみ、聴衆の心をわしづかみにした」⁸⁾。そのような「史上最強のピアノの巨匠」の家の玄関の呼び鈴を鳴らす時、ポリーヌの乙女心は高鳴り、話しかけられれば赤面してしまうほどであったと、本人は後に述懐している。

6) Thérèse Marix-Spire, *Les Romantiques et la musique : le cas de George Sand*, 1954, Nouvelles éditions latines, pp. 232–233.

7) Franz Liszt, Pauline Viardot-Garcia dans *Neue Zeitschrift für Musik*, Leipzig, 28 janvier 1859.

8) 浦久俊彦『フランツ・リストはなぜ女たちを失神させたのか』新潮社2013。ショパンは、ピアニストとしてのリストに敬服していた。8年間で1000回のコンサートを開いたリスト。その収入の半分を慈善団体や困窮した人々のために寄付したという。p. 146.

ポリーヌが初恋の人のようにリストに心を奪われたのは、彼の容貌や才能だけではなく、リストの音楽に対する公正な姿勢にあった。リストの個人的な経験から涵養された音楽に対する姿勢や教育方針が、ポリーヌの高貴な気高い心を捉えたからであった。そうした姿勢とは、たとえばリストの個人的経験に根ざしていた。

「ハンガリーの豪族エステルハージ家に仕える役人で音楽愛好家」を父に持つ幼少のリストは、難解なあらゆる曲を正確に弾きこなした。「神童あらわる！」と報じられた9歳のリストに地元の貴族たちは、6年間600グルデンの奨学金の給付を約束した。その一方でリストは、彼のウイーンの師匠ツェルニーが、出来が悪ければ貧しい弟子にも高額な授業料を要求するのを目にしていた。

それは、当時の音楽教師の間では常識的なことだったが、リストにとっては再考を促されるレッスン方法だった。他方、まだ少年の面影のあったリストが父親アダムと初めてフランスに着き、パリ音楽院の門を叩いたとき、外国人という理由により、にべもなく入学を拒否されたことがあった。これらの経験をもつリストは、師匠たちの一般的な弟子の受け入れ方とはまったく異なるレッスン方法を実践した。誰にでも無料でピアノのレッスンをおこなうという、一般には想像しがたい独創的な教授方法を取ったのだった⁹⁾。

ポリーヌは後年、音楽教育に携わったとき、恩師の高潔な教育精神に習い、彼女もまた無料のレッスンをおこない、サンドの寛大さに負けないほど惜しみない愛情で弟子たちの育成にあたり、グノー、サンサーンス、フォーレといった優秀な若手の作曲家を輩出した。

ポリーヌは後に、ショパンと非常に親しい交友関係をもつことになるが、彼が他界した後は、数十年後のことであるが再びリストに会っている。このことから、ポリーヌとリストには音楽に対する姿勢や考え方に共通する理想があり、それが師弟関係を通し、二人を強く結びつけていたと推測される。

リストは15歳のポリーヌのピアノの才能を高く評価し、ポリーヌ自身も

9) 同書、p. 173.

将来ピアニストになることを強く望んだ。そのことを知ったリストは母親のヨアシナにポリヌをピアニストにするよう説得したが、ヨアシナは「ピアニストは男の職業だ」として耳を貸さず、夫マヌエルの死の4年後に若くして急逝した長女マリア・マリブランの後継者として、次女のポリヌをオペラ歌手に育て上げるべく、娘の音楽教育に勤しんだのだった。ここには「男は演奏、女は歌」という役割分担意識が大手を振ってまかり通っていた時代の暗部が垣間見られる。「音楽研究者のほとんどが男性だったため、音楽史が男性の目線で紡がれてしまった。作曲、演奏は男の仕事、女は歌うものといった役割分担も無意識の底に植え付けられていた。創造的な女性は、社会の仕組みに埋もれていく運命にあった。」と、いみじくも小林緑氏が指摘する通り、この時のポリヌの運命は当時の社会の仕組みに囲込まれてしまい、抗い難いものであったと推測される¹⁰⁾。

ポリヌは、ベルギーのブリュッセルでプロの歌手としてデビュー公演をおこなった後、1839年、まだ18歳にも達しない若さでロンドンに渡り、ロッシーニの歌劇「オセロ」のデズデモナの役を演じた。多少の欠点は見られたものの、情熱と最高の技とが見事に合致した彼女の高度な舞台は、観衆の心を捉え魅了して止まず、総じて驚異的な大成功というのが、批評家たちの評価であった。歌姫ポリヌは、1838年には、すでにパリのサロンで広く知られるようになっていた。事実、その頃、ダゲー夫人は彼女の伴侶だった愛人リスト宛の手紙に「彼女は流行の最高潮にいる」と書き送っている。

当初は、姉の名声の陰に隠れていたかにみえたポリヌだった。しかし、生前のマリア・マリブランが「妹の方が私よりずっと音楽家だ」と認識し、その成功を予感していたように、彼女は美貌の人気歌手だった姉をも凌ぐ天才的女性オペラ歌手として彗星のようにパリのオペラ界に出現した。サンドの仲介によるルイ・ヴィアルドとの結婚後も歌い続け、ヨーロッパでも一世を風靡する偉大な歌姫として知られる一方で、女性には不可能と見なされて

10) 小林緑『女性作曲家列伝』平凡社1999年。

いた作曲やオペラ、パントマイム曲などの制作にも携わり、「ハイルリ」「シンデレラ」（オペラ）「日本にて」（パントマイム）などの名品を後世に残したのだった¹¹⁾。

I.3. ポリヌの多彩な才能

ポリヌに魅了された19世紀の著名人たちは、様々な言説を残し行動を起こしている。次のショパン、ミュッセ、ツルゲーネフの場合はその好例と言えるだろう。

—ショパンは「彼女がいないとインスピレーションが湧かない」と嘆き、パリやロンドンのコンサートでは、彼女の歌のピアノ伴奏を担当した。

—ベルギーで初めてポリヌの舞台を観劇したミュッセは、「彼女は芸術家であり王女のようなようだった」という印象を受け、その舞台は彼にとっては「成功というより革命だった」と述懐している。「ポリヌの内なる才能が外にあふれ出ている」と感動した彼は、たちまちポリヌの虜となり、遂に彼女に結婚を申し込みをするまでに到った¹²⁾。

—ロシア文学の最高傑作『父と子』の著者イワン・ツルゲーネフは、ポ

11) 「日本にて」の脚本の著者サビーヌ・マンセルに関しては、以下の研究が参考となる。山口順子「パントマイム 日本にて」（『カイエ・デュ・ミモザ』（日仏女性研究学会）<https://drive.google.com/file/d/0B19kLQM-kTSrYzVGY3IZNTIURXc/view>

12) 19歳のポリヌはミュッセの告白を退け、サンドの助言もあって、以前からガルス家と親しく交流していた、サンサーンスによれば当時の最も美男のひとりで21歳も年上のルイ・ヴィアルドと結婚した。当時はイタリア座の座長だった（1838年1月15日にイタリア座で火災が起き、支配人の一人が犠牲となったとき、ルイは劇場をたった二週間で再開可能にした。その功績を称え、イタリア座の座長は彼を大臣に紹介、その関係でサンドとも親しかった）。ルイは金持ちの娘と婚約していたが、結婚式の前夜に突然婚約を破棄した。娘がレジティミストだと判明したためだった。もと弁護士で作家の彼は翻訳家として『ドンキホーテ』（1836）の仏訳でも知られ、画家の友人も多かった。芸術、文学、社会科学に関する知識が豊かなこともあり、文学畑では彼の名前はよく知られていた。Thérèse Marix = Spire, *Lettres inédites de George Sand et de Pauline Viardot*, Flammarion, 1959, p. 23.

リーヌが既婚者であることも顧みず、祖国を捨ててヴィアルド夫妻の傍らで暮らす生き方を選択し、人生の最後をポリーヌの腕の中で終えている。

これらの例が示しているように、彼女の人気はひとかたならぬものであった。

ところが、これほどの人気があったのは、ポリーヌ・ヴィアルドが美貌に恵まれていたからではなく、マリー・ダグー夫人が「彼女は醜すぎる」と書いてしまうほど、姉のマリブランより容貌が遙かに劣っていたことは確かだったようである。それにも関わらず、彼女は19世紀のフランスやヨーロッパの作家、芸術家やエリートたち、果ては貴族や王家の人間たちの心を捉え、深く感動させた。

このようなポリーヌの人口に膾炙したイメージは、どこから来ているのか。その理由を探ってみると、第一に、彼女が歌い演じるオペラが彼らにとって前代未聞なほど、素晴らしいものであった事実が挙げられる。

作曲家で音楽批評家のレイノルド・アーンは、ポリーヌ・ヴィアルドの声域を音符で表し、彼女の歌える音域が人並以上に広がったことを明証している。

「彼女は醜すぎる」と書いたダグー夫人も、声や歌唱力に関しては「声は素晴らしく、あらゆる難点を克服している。私には、彼女が誇らしく気高く見えたわ。彼女に将来が開けていることは確かです。」と付け加えている¹³⁾。

さらに、ミュッセが、ポリーヌは技巧だけではなく「心にのみ届く心から発せられた声音」を持っていて「野生の果実のように美味だ」と言えば、サンドは「男性的な力強い声の響きはかつて聞いたことのない」ものであり、「この声は魂から出て魂に至る」と感嘆し、感動の涙を止められなかったと書き残している¹⁴⁾。

オペラにおける演技の面で、ポリーヌを絶賛したのは、テオフィル・ゴーチエであった。ゴーチエは、歌劇「シンデレラ」の「貧しい乙女から女王に

13) 1839年11月25日付のマリー・ダグー夫人のフランツ・リストへの手紙。

14) Thérèse Marix-Spire, *ibid.*, p. 14.

転じるヒロイン役でポリーヌが二つの役をいとも簡単に正しく演じきった。しかもごく自然で無理が一切ない。彼女は最高水準をいく歌姫だ。」と『演劇の歴史』の第一巻に記しているのである。

さらに注目すべきは、女性でありながら、作曲家としてもポリーヌは才能を示していたことである。彼女の作曲力を高く評価していたショパンは、次のようにワルシャワの家族に書き送っている。

ヴィアルド夫人は、彼女が去年ウイーンで作曲したスペインの歌曲を歌ってくれた。彼女はあなたたちにも歌ってくれと約束してくれているよ。このジャンルでこれ以上に美しい曲はない。ほくはこの曲が好きだ。この曲は人を一つに結びつけてくれるんだ¹⁵⁾。

サンドもまた、ショパンが評価するこの創作者の才能について、音楽雑誌の中で「18歳で本当に美しく力強い音楽を書く若い女性がいる」とポリーヌを絶賛した¹⁶⁾。

このように、ポリーヌは、音楽という彼女の専門分野で、テノールとソプラノの双方をこなす両性具有的な声（コントラルト）で歌い、男性の仕事とされた作曲に、怖じ気づくことなく果敢に挑み、男性に劣らぬ結果を出した。ポリーヌは、サンドの「カンディラトン（ひそひそ話）」を気にしない生き方が大好きだと言っていたが、彼女の中に自分自身と共通するものを見出していたに違いない。

さらにポリーヌは、上記の専門の音楽以外の分野でも優れた天才ぶりを発揮していた。第一に、彼女は語学力に優れていたのである。兄弟姉妹が「蟻さん」とあだ名をつけたほど真面目で働き者だったポリーヌは、スペイン語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、ロシア語、英語の六カ国語に堪能で

15) 1845年7月18日付のショパンがワルシャワの家族に宛てた手紙。

16) Thérèse Marix-Spire, *op.cit.*, p. 103.

あった。これらの言語以外にもギリシャ語も読んでいたという証言があったとも言われる。英語を話したミュッセは、彼女になお一層の親近感を覚えていたことだろう。

第二に、絵画の分野、とくにデッサンにおいても、ポリーヌは天才的だった。彼女が描いたショパンの似顔絵が示しているように、彼女は対象とする人物の特徴を掴んで正確な線で描くことができた。ドラクロワはノアンで「聖母の教育」*Sainte Anne* と題する絵画を描いていた時、ポリーヌが「しっかりした線で描き、似顔絵の才能があること」に驚き、「聖母の教育」の農村の女性の部分を描いてほしいと彼女に頼んだほどであった。美術の面でも欧州の歌姫は、才能ある女性だったのである¹⁷⁾。

ポリーヌに傾倒した人々が多くいた理由には、また、ポリーヌ自身の顔立ちや性格など、人間性に由来する事由も挙げられる。彼女は美しくはなかったが、「知的な眼差し」や「すばらしい歯」と「美しい微笑」をもっていたと言われているからである。

サンドがとくにポリーヌに惹かれたのは、彼女の完璧さを目指す徹底性にあった。1859年1月21日、ポリーヌは、「何かをやらなくてはならないときは、わたしは火の粉が飛んできてでもやり遂げるでしょう。」と書いている。彼女のオペラを観たサンドは、自分では通常、泣くことなどない「強い気性」でありながら、涙が止まらなかったと述べている。「芸術への並外れた忠誠心」と「真・善・美」の理想に向かって突き進む勇気と気概のあるポリーヌは、また「ギリシャ的な美しさと最高の純粹さ」を持ち合わせており、サンドが理想とする女性の「完璧な典型」であった。サンドにとって、ポリーヌは「芸術にルネッサンスをもたらす炎」であり「女性司祭」であった。このような「芸術にすべてを賭けている聖女」を作家サンドが「コンスエロ」のモデルに抜擢しない理由は、どこにも見あたらなかったと言っても過言ではないだろう。

17) Thérèse Marix-Spire, *op.cit.*, p. 20.

1840年代、サンドとショパンは、一年のうちの半年をパリのモンマルトルの麓に位置するオルレアン広場に近いうアパートマンで暮らした。ヌーヴェル・アテンヌと呼ばれる界隈であった。そこでは芸術家やエリートが集まり、コンサートを開き、音楽を聴いた。著作を朗読し、絵画や文学について議論し、情報を交換し合うことにより、お互いの芸術精神を切磋琢磨したのだった。ところでサンドは、ショパンが毎年夏の日を過ごしていたベリー地方にあるサンド邸のノアの城館を友人の芸術家や作家たちに開放していた。が、これはサンドがこのパリのヌーヴェル・アテンヌの地方版を考えていたことも推測される。かつては、バルザックが二週間ほど滞在したこの城館には、フロベール、ゴーチエ、デュマ・フィス、ツルゲーネフ等が訪れ、ときには長期滞在中をした。とりわけ、ドラクロワとポリヌは、サンドやショパンと共に田園の美しい夏を心ゆくまで愉しみ、仕事に打ち込んだ。ノアの館もサンドのお陰で、ある意味では芸術家が集う、第二のヌーヴェル・アテンヌを形成していたと言えるだろう。

サンドは、プロ並みの音楽の知識を持つ祖母に幼い頃から音楽を学んでいたため、リストやショパン、ポリヌといった高度な水準の音楽家たちと意見を交わすことが出来、親しく交流することも可能だったと言われているが、いずれにせよ、音楽はサンドの芸術活動にとって極めて重要な要素であった。音楽には言葉では表現し得ないものがあると考えていたからであった。

故郷のポーランドを彷彿とさせるノアは、ショパンにとっても、心休まる場所であると同時に作曲が捗る理想的な仕事場であり、様々なバラード、スケルツォ、マズルカ、ノクターン、ポロネーズ、ワルツなど数多くの作品が誕生した生産的な場となった。

そのショパンやサンドにとって、またドラクロワにとっても、多彩な才能をもつ女性芸術家のポリヌは、欠くことのできない極めて大切な存在だったのである。

ポリヌ・ヴィアルドの人となりを俯瞰したところで、次にサンドとポリヌの関係について考察してみたい。

II. ジョルジュ・サンド／ポーリーヌ・ヴィアルド往復書簡

テレーズ・マリックス＝スピールは、1839年から1840年の冬にかけてサンドがポーリーヌに送った手紙が二人の最初の交流であろうと推測している。実際には、サンドは1839年にイタリア座で初めてポーリーヌ・ヴィアルドのオペラを観劇して以来、あらゆる手段を使ってポーリーヌと連絡を取ろうとした形跡が残されている。いずれにせよ、サンドの最初の手紙から、亡くなる半年前にポーリーヌ宛てに送った1875年12月28日付のサンド最後の手紙に到るまでの期間は、およそ36年の長きに及ぶ。マリックス＝スピールは、『ジョルジュ・サンドとポーリーヌ・ヴィアルドの未刊の手紙』の中で最も頻繁に書簡が交換された1839年から10年間の121通の書簡を取り上げているが、詳細な註を添えて編纂された二人の書簡の総頁数は、前書きを除き、優に200頁を超えている。

全体的にサンドの側からの手紙が多く、筆無精で海外コンサートで多忙だったポーリーヌからの手紙の数はサンドに比べれば少ないが、お互いかなり長文の手紙も書いている。往復書簡の内容は、ショパンの話題、ポーリーヌの公演、音楽や芸術に関すること、サンドの小説について、あるいは、双方の子どもや友人の話題、贈り物のお礼、ノアンやパリでの再会の予定や打ち合わせなど、多岐にわたっている。サンドが9年間の歳月を共にしたショパンに音楽の専門的な知識に関する質問や言づてをサンドを介して依頼している場合もあれば、ごく希れにはあるが、サンドの手紙の最後に、ショパン自身の手でポーリーヌに宛てユーモア溢れる一行を付け加える例も垣間見られる。ショパンにとっても、ポーリーヌ・ヴィアルドは、「彼女がいないとインスピレーションが湧かない」とサンドに嘆くほどであった。ポーリーヌはショパンにとって、極めて貴重な存在であったと言っても過言ではないだろう¹⁸⁾。

18) ポーリーヌは、ショパンのマズルカを歌曲に編曲し、その曲をショパンのピアノ伴奏で歌った。1848年8月半ば、彼女はロンドンで開かれたコンサートでもショパンと共演している。翌年、マドレーヌ寺院のショパンの葬儀でモー

次の引用文は、サンドからポリヌに宛てた手紙である。

たった一時間あなたに会うだけで、人生の重圧が消え去ってしまいます。まるで私はあなたと一緒に昨日この世に生まれてきて、私はあなたの中にある完全なものすべてとあらゆる優しさを糧に生きているかのようです¹⁹⁾。

他方、ポリヌも、次のような手紙をサンドに書き送っている。

貴女のようなお偉い方に喜んで頂ける幸せを味わえるなんて、それだけで私はこの世に生まれてきて本当によかったと思います²⁰⁾。

これら二通の手紙は、二人の結びつきがいかに尊敬と愛情に裏打ちされた緊密なものであったかを明らかにしていると言えるだろう。

その関係は、母と娘の親子愛を象徴しているかと思われるほどである。事実、サンドは実の娘のソランジュよりポリヌに対し、遙かに頻繁に手紙を書き送っている。彼女の海外公演が成功したかどうか、健康状態はどうかを心配し、返事が滞る場合には、知人に問い合わせるなど、肉親に対する以上に深い母性愛をポリヌに注いでいた形跡が認められるのである。これに対し、ポリヌの方では、サンドの気遣いや助言に感謝し、極めて謙虚に丁寧な愛情を込めた書状を認め、サンドの好意に応えている。

サンドがいかにポリヌに心を砕いていたかは、次のような事例からも明らかである。

ツァルトの「レクイエム」を歌ったのも、ポリヌであった。

19) 1841年6月22日付のジョルジュ・サンドからポリヌ・ヴィアルドに宛てた書簡。

20) 1860年10月30日付のポリヌ・ヴィアルドがジョルジュ・サンドに宛てた書簡。

- (1) ルイ・ヴィアルドとポリーンとの結婚は、彼女に執拗につき纏う詩人ミュッセを厄介払いするためにサンドが考え抜いて画策したものであった。ミュッセは、かつてサンドとの「ヴェネチアの燃える恋」で知られるが、のちにアカデミー・フランセーズの会員に選出されている。
- (2) ライバルを遙かに凌ぐ才能と実力がありながら、周囲の嫉妬や政治的な思惑により、ポリーンがパリのオペラ界から村八分の扱いを受けたとき、サンドは国内公演ではなく海外遠征コンサートをするよう助言した。その結果、ポリーンは「欧州の歌姫」と言われるほど大人気オペラ歌手となり、ロンドン、ウィーン、プラハ、ベルリン、サン・ペテルスブルグなど欧州諸国の各地でコンサートを請われ、充実した多忙な日々を過ごした²¹⁾。
- (3) 欧州のコンサート公演で多忙なポリーンを助けるために、サンドはヴィアルド夫妻の長女ルイズをノアンで数ヶ月預かったこともあった。
- (4) オペラ界を我がものにしていたプリ・マドンナであったラ・グリズイの人氣が落ち目になったことを知り、「世界の女王」ポリーンにオペラ座との契約を促したのもサンドであった。1849年、ポリーンはオペラ座で『予言者』を歌い、大成功を博している²²⁾。

21) オペラ座はポリーンが外国（イタリアの新婚旅行）に行っていることを口実に美辞麗句を並べ、彼女との契約を結ばなかった。ベルリオーズはこの村八分に対し「なんという言う世界だ、我々のオペラ界とは！」と嘆いた。メイヤーが介入し、ポリーンのために弁護したが無駄だった。Cf. Thérèse Marix-Spire, *op.cit.*, pp. 33-35. 当時、ミュッセは、彼女の肖像画まで持っているほどポリーンに心酔し求婚したが、ポリーンは自らの芸術で生きてゆくことを選択した。彼女よりずっと著名であり自尊心を傷つけられたミュッセが、腹いせに彼女のオペラ座契約を阻止したとする説もある。参照：Nicole Barry, *Pauline Viardot et George Sand*, Flammarion, 1990, pp. 35-58. ミュッセは、その後、「Mademoiselle X」と題するポリーンに対する復讐の詩を書いた（同書 p. 54.）。さらに39歳になったミュッセはポリーンに会いに行き、自分の作品を歌って欲しいと願い出るが、人氣絶頂で多忙だったポリーンはこの申し出を断っている。（同書 pp. 183-184.）

22) Thérèse Marix-Spire, *op.cit.*, p. 240.

これら数々の事例が物語っているように、サンドはポリヌの人生の節々に適材適所の助言を与え、援助することにより若き歌姫の人生の極めて有益なナビゲーターの役割を果たした。ポリヌにとっても、こうしたサンドの存在は、重要で有り難いものであったに違いない。

ここまで歌姫の私的な生活でのサンドの役割について吟味してきたが、公的な場での二人の関係について、次章で考察することとする。

Ⅲ. 文学と音楽の融合プロジェクト

文学と音楽という専門分野で生業を為していたジョルジュ・サンドとポリヌ・ヴィアルドの緊密な交流関係からは、二つの分野を融合するいくつかの企画が誕生していたことが、ニコール・バリーおよびマリックス・スピールの文献資料により確認された。これらの融合プロジェクトを整理してみると、概ね以下の三種類に分類される。

1. おもにサンドがイニシアティヴをとり、自身で実現した企画
2. サンドが提案し準備を整え、ポリヌが実現させた企画
3. ポリヌが提案し実現させようとした企画

次に、上記の3点について、関連する書簡を中心に考察を試みる。

Ⅲ.1. 『歌姫コンスエロ』とその続編『ルードルシュタット伯爵夫人』

サンドが中心となってイニシアティヴをとり、自身で実現した企画として、1841年から1843年にかけて『独立評論』誌に連載形式で発表した長編小説『歌姫コンスエロ』とその続編『ルードルシュタット伯爵夫人』が挙げられる。

シヨパンと生活をともにしていた時期に書かれたこの大長編小説には、哲学者のジャン＝ジャック・ルソーやピエール・ルルー、オペラ歌手ポリヌ・ヴィアルドの夫でサンドとともに『独立評論』紙を立ち上げたルイ・ヴィアルド、詩人のミッキエヴィッチ、それにサンドの親友でポリヌの

ピアノの師匠であった作曲家リストの多大な影響が認められるとされている。

サンドは当初、この小説を男性登場人物しか存在しない極めて宗教的な作品である『スピリデイオン』のような系列の中編小説にする予定だった。しかし、最終的には、恐怖、狂気や愛、オペラ音楽や宗教的イニシエーションや秘密結社といった主題が立ち現れては交差する、幻想小説、歴史小説、恋愛小説の様相を呈した18世紀ヨーロッパを舞台とした一大長編ドラマに変幻したのだった。モーツアルトの「魅惑のフルート」にも似ていることから、この小説は一種の「叙述されたオペラ」とも云われ、サンドの最高傑作の一つに数えられていることも付記しておこう。

ところで、ポリヌがこの小説のヒロインのモデルであるという確証はあるのだろうか。確かにポリヌは、この作品に関し直接の介入はしてはいないが、サンドが執筆をしていた時期に彼女に宛てて「あなたはわたしが知り、これまでに知った最も完璧な存在です。」²³⁾「あなたは私の青春、私の栄光、そして私の未来なのです。」²⁴⁾と書き送っていることから、サンドが完璧と考える女性を小説のモデルとしていたことは、想像に難くない。

さらに、先述したメキシコでの強盗の略奪場面やコンスエロのヴェニス歌手修業、オペラ界のプリマドンナの栄枯盛衰、ウィーンの宮廷の裏表²⁵⁾など様々な描写やエピソードが、歌姫ポリヌの容姿、彼女がサンドに語った逸話と重複することからも、ポリヌの影響は大きいと考えられる。

ドラクロワもそのことに気付いていたのだろう、ポリヌこそが「あなたのインスピレーションの源となった女の子」であり、コンスエロは「あなたのもっとも純粋な典型ですね」という文面の手紙をサンドに送っている²⁶⁾。

23) サンドのポリヌ・ヴィアルド宛の手紙 1841年6月22日。

24) サンドのポリヌ・ヴィアルド宛の手紙 1842年5月25日。

25) 1843年5月初旬のサンド宛の手紙で、ポリヌはウィーンで皇后に会い、皇帝と長時間、会話を交わした様子など詳しく述べている。Cf. Thérèse Marix-Spire, *Lettres inédites, op.cit.*, p. 171.

26) Cf. Thérèse Marix-Spire, *Lettres inédites, op.cit.*, p. 20. 1842年5月30日付のドラクロワのサンド宛ての手紙。

1842年の夏、ポリーヌとルイはサンドが贈呈したコンスエロの物語を涙を流しながら読んだ。ポリーヌは次のような手紙をサンドに送り、作家に感謝の意を表している。

あなたは何て素晴らしいのでしょうか。コンスエロが誕生してからというもの、もはや私は私の中で何が起きているのか、あなたにお伝えすることができません。ただ、このことで私はあなたのことを一万倍も好きになってしまいました。また、あなたがこの見事な人物を創造するために使われた断片のひとつが私であったことをとても誇りに思っています。このことは、たぶん、私がこの世で為すことの最良のものとなることでしょう²⁷⁾。

夫のルイ・ヴィアルドは、感動を隠しきれず、次のような文面を書かずにはいられなかったようである。

二章、三章と読み続けることなんて出来ませんでした。優しい気持ちになり、賞賛の念に打たれて、僕はむせび泣き、息を詰まらせました。本を閉じざるを得ませんでした²⁸⁾。

リストとピエール・ルルーの忠実な弟子であったジョルジュ・サンドは、この時期、「芸術の神聖なる役割」を確信するに至り、スピリディオンが苦悩した神秘主義の危機を脱した。この「芸術の神聖なる役割」という崇高な理想を世に広めるために、サンドは「音楽における理想の女司祭」²⁹⁾を音楽小説『歌姫コンスエロ』とその続編『ルードルシュタット伯爵夫人』の中に創造した。そのヒロインとは、ドラクロワがサンドに「最も純粋な典型」と強調したまさに「音楽にルネッサンスをもたらす炎」の音楽家、ポリーヌ・

27) ポリーヌ・ヴィアルドのサンドへの手紙 1842年7月29日。

28) ルイ・ヴィアルドのサンドへの手紙 1842年7月29日。

29) Thérèse Marix-Spire, *Lettres inédites*, *op.cit.* p. 43.

ヴィアルドだったのである。

Ⅲ.2. 「ヌーヴェル・マルセイエーズ」と「若き共和国」

1847年、サンドは、様々な策略を使ってライバルを蹴落としオペラ座のトップの座を占領し続けたプリマドンナ、ラ・グリズィが落ち目になっていることに注目し、パリの劇場から追放されていたポリヌにオペラ座と契約してはどうかと助言した³⁰⁾。暫くしてから、ポリヌはオペラ座との契約に成功するが、この年は二月革命の年でもあった。1848年2月22日、40万人のフランス国民がマドレーヌ広場から7月の記念柱まで行進し、パリは熱狂と感動に酔いしれた。サンドにとって、1789年の大革命以来七月革命を経てまもなく、政治が決して一般市民の手に渡ることのなかった政治体制が覆され、第二共和制の名のもとによりやく新たな時代が訪れる歴史的な時節であった。普段は政治的意見を述べることのないポリヌも、この時ばかりはサンドに次のような臨場感あふれる手紙を送っている。

ああ、私たちは何て偉大な時代に生きているのでしょうか。あなたの胸は幸福な気持ちで高鳴っていることでしょう」³¹⁾

ポリヌの1848年の手紙に対し、サンドの反応は次のようにものであった。

ええ、私は幸せです。(……)やはり、私たちは共和主義者となるのです。私の全人生の思想と夢、それが実現するのです。私はこのことがあなたの寛大な心をうち震えさせるだろうと思っていました。政治で実現されたばかりの革命を、あなたが音楽の分野でなし遂げてくれると期待しています。

30) Thérèse Marix-Spire, *Lettres inédites*, op.cit., p. 240.

31) ポリヌ・ヴィアルドのサンドへの手紙 1848年3月14日。

1848年3月14日、ヴィアルド夫妻はパリに到着していた。サンドは、政治が為した革命を芸術の分野でもおこなわれることを望み、その役割を彼女の「コンスエロ」であるポリヌに期待したのだった。

上記の二つの引用文が示しているように、1848年のパリは、大革命以来の夢がようやく実現される熱気と興奮に包まれていた。51年のルイ・ナポレオンによるクーデターまでの短期間ではあったが、まさに理想とされる共和政が敷かれようとしていたのだった。

この時、サンドが『共和国公報』などに記事を寄せ、熱心に政治的な活動を展開し、友人のルイ・ブランやルドリュ・ロラン等が設立した共和政の臨時政府に協力したことは、よく知られている³²⁾。そのサンドが「音楽の分野でも革命を！」とポリヌにも呼びかけた事実は注目に値するだろう。

サンドは単に呼びかけをおこなっただけではなく、自身がイニシアティブを取り、行動を起こしていた。

1848年3月末、「フランス座」から新しく名称を変えた「共和国劇場」で「自由の祭典」が開催されることになっていたのだが、これを機会に古い「マルセイエーズ」ではなく、新たな「ヌーヴェル・マルセイエーズ」を歌って祝うべきだと考えたサンドは、臨時政府の内務大臣となっていた友人ルドリュ・ロランを説得する働きかけを積極的におこなったのである。およそ二週間後、ポリヌはサンドに「ただ今、私の「若き共和国」を書き写し終えたところです。テノール用に書きました。」³³⁾という文面をサンドに送っている³⁴⁾。ポリヌが手紙文で言及している「若き共和国」とは、サンドの

32) 1848年、サンドは『共和国公報』第12号には「女性の社会的権利」という題名の寄稿文を掲載した。『レフォルム』紙および『真の共和国』紙の編集者宛てには「ひとつの性の名のもとに」と題された手紙を、政府中央委員会委員には「女性たちに平等の権利を」と題した、いずれも社会的影響力のある人々に宛てた書簡という形で女性擁護を内容とする手紙を執筆した。

33) 1848年3月31日（金）付のポリヌからサンドへの手紙。Thérèse Marix-Spire, *op.cit.*, p. 248.

34) 「若き共和国」は、ピエール・デュモン Pierre Dumont という名前の詩人の歌詞にポリヌが曲をつけたものだった。

原案の「ヌーヴェル・マルセイエーズ」に他ならなかった³⁵⁾。

サンドが息子モーリスへ宛てた手紙によれば、祭典は次のように執り行われることになっていた。

臨時政府も参列し³⁶⁾、わたしが開会の挨拶を述べます。ポリヌを先頭にパリ音楽院のコーラス隊が、ピエール・デュモンという大衆歌手の歌詞にポリヌが曲をつけた「若き共和国」（「新マルセイエーズ」の別名）のお披露目がおこなわれるでしょう。ラッセルやその他の歌手も一緒に歌うことになっています。一方、ラッセルは、どこかの冴えないサロンで毎夜、深みのないあの声で、しかし、アクセントをつけた素敵な表情と身振りで、これまでの「マルセイエーズ」を歌うことでしょう³⁷⁾。

さらにサンドは、「こういう風に仕向けたのは誰かと言えば、私だったのよ」と、モーリスに少々自慢げに書き送っている。1848年3月31日の手紙でサンドは共和国劇場の祭典はおよそ一週間後の予定だと書いているが、実際には、4月6日（木曜日）におこなわれた。当日、体調不良で欠席した

35) Nicole Barry, *op.cit.*, pp. 164–165. 今日、この曲の演奏を実際に聴くことができるかどうかは確認されていない。

36) 詩人で外務大臣のラ・マルティエヌ、ルドリュ・ロラン内務大臣、カルノ文部大臣等が列席した。ニコル・バリーは、ポリヌは真摯な共和主義者ではあったが、サンドの熱狂ぶりについていけなかったのではないかと推測している。バリーはまた、マリックス＝スピールが述べていない事実—このヌーヴェル・マルセイエーズ（新しい国歌）の決定はコンクール形式で争われ、ポリヌの曲は銅メダルで、他の応募曲の金賞、銀賞を獲得した曲とともに披露されたこと—を明白にしている。この応募決定の審査員の中にポリヌが冷たくしたミュッセがいたこともポリヌの「若き共和国」が銅メダルに終わったことや彼女の祝典の欠席に関連があるものと推測される。参照：Nicole Barry, *op.cit.*, pp. 165–166.

37) Wladimir Karénine, *George Sand*, t. IV, p. 46.

ポリヌに替わり、テノールのロジェが、白いモスリンのドレスに三色旗の帯をつけたパリ音楽院の50名の女生徒たちのコーラス隊をバックに歌った³⁸⁾。

サンドの働きかけで実現されたこの企画は、サンドとポリヌの間の私的レベルの個人的な満足にとどまっただけではなく、共和国政府にとっても意義深いことであり、ルドリュ・ロランにとって気がかりなことだったようだ³⁹⁾。というのは、「若き共和国」に関し、ダニエル・ステルヌ（マリー・ダグー夫人）が『1848年の革命史』の中で「ルドリュ・ロランがいつも「若き共和国」のことを話していた」と記しているからである。

サンドが手紙の中で述べていた「政治の分野で実現されたばかりの革命が音楽の分野で成し遂げられた」この事例こそ、サンド自身が提案し準備を整え、ポリヌが実現させた画期的なプロジェクトであった⁴⁰⁾。

Ⅲ.3. 音楽と文学の融合：『魔の沼』『コンスエロ』プロジェクト

『魔の沼』（1846）は、サンドがショパンに献呈した小説である。農村地帯を舞台とし農耕従事者を主人公としたサンドの小説群は、一般に「田園小説」とよばれているが、『魔の沼』はその中でも最も代表的な小説であり、日本では最初に翻訳されたサンドの作品である（1912）。夕刻になると辺り一帯を霧が覆い旅人を迷子にさせることから『魔の沼』とよばれている、その沼の近くで道に迷い偶然に出会うマリーとジェルマンが主人公の物語である。

この『魔の沼』をオペラコミックにする計画案があり、ポリヌはサンドにこの計画の実現を約束していた。1860年2月、サンドはこの計画案に言及し、ポリヌに次のような一筆を認めている。

『魔の沼』の全ての章があなたの手元に届いているかどうかわかりま

38) Thérèse Marix-Spire, *Lettres inédites, op.cit.*, pp. 249–250.

39) *Ibid.*, 248.

40) 「若き共和国」に関し、マリックス・スピールは、この曲はほかの

せんが、可哀想なヴァエズは父親を亡くし、それ以来、便りがありません。この計画がうまくいきそうかどうか、分かったら報せて下さいね⁴¹⁾。

ヴァエズとはギユスタヴ・ヴァエズのことで、彼が台本を担当する予定だった。ジョルジュ・リューバンによれば、この計画は、結局、日の目をみることはなかった。

ところで、ヴィアルド夫妻の1843年は、ヨーロッパ公演で忙殺された。ポリーヌは、サンドにまだ幼い長女ルイズを預け、ウイーンからプラハへそれからまたベルリンへとハードな演奏活動を続けていたのである。サンドの方は、5月22日に、ショパンと赤ん坊のルイズ、料理担当の女中、ショパンの使用人それにルイズの養育係を連れた一行六名でパリからノアンに戻っていた。サンドはポリーヌへの手紙に、ルイズに歯が四本生えた、元気にしている等々、赤ん坊の様子を詳しく報せた。三人も子どもがいながら人前では決してこどもの話をしなかった姉のマリア・マリブランとは正反対に、ポリーヌは子どもの様子が書かれたサンドの手紙を繰り返し読み暗記してしまうほど、子供思いの母親ぶりであった。そんなポリーヌは、ウイーンでは夫ルイの作品が有名になっていて彼が引っ張りだこであること、マイヤベアーに逢ってコンスエロの話二人でしているが、彼は自分のことを「親愛なるコンスエロさん」と呼んでいることなどを8月2日付の手紙に綴っている。

ポリーヌは同便で、マイヤベアーから聞いた『コンスエロ』とその続編『ルードルシュタッド公爵夫人』に関するもう一つの計画について次のように語っている。

あなたのコンスエロで彼は頭がぼーっとなってしまっていますよ。彼

41) George Sand, *Correspondence*, t. XXV, p. 985 et note 1.

はしょっちゅうそのことばかり話し、夢見ている、あなたがパリにお戻りになったら、すぐにお会いして話をしたいと言っています。彼は、ボヘミアの巨人の城の部分をオペラにすることを夢見ているのです⁴²⁾。

コンスエロの物語を歌劇にしたいと考えていたのは、マイヤベアだけではなかった。1943年10月29日の『パリ・ガゼット音楽誌』*Revue et Gazette musicale de Paris*は「ドイツの複数の新聞は、リストがサンドの作品をもとにした五幕ものの歌劇の創作を本格的に構想している」と書いて「と述べ、同誌の11月5日の記事は「リストがジョルジュ・サンドの詩の楽譜を書いているようだ。テーマはコンスエロの小説から借りたものとなるようだ。」と報じている。しかし、1843年はリストは旅行中だったためにサンドとパリで会う機会はなく、この企画が実現されたかどうかは確認されていない。

その後これらのプロジェクトが実施されたという記録は見当たらないことから、ポリヌの『魔の沼』のオペラコミック案および『コンスエロ』とその続編『ルードルシュタット公爵夫人』のマイヤベア案もリスト案も企画倒れとなってしまったものと推測されるが、少なくとも19世紀にアーティストの側からサンドの名作のオペラ化を企画し、芸術と文学の融合を企図した事実が残っていることは、文学史および音楽史にとって注目すべき重要な事象と見なしうるだろう。

おわりに

本稿では、ポリヌ・ヴィアルドという知られざる女性音楽家を知るために、まず最初に彼女の生い立ちと師匠フランツ・リストから受けた音楽教育思想および彼女の多彩な才能について概観した。次いで、サンドとポリヌとの往復書簡に見られる文学と音楽の融合プロジェクトを考察することにより (1) コンスエロの物語が仲立ちとなってサンドとポリヌの関係の緊密

42) Thérèse Marix-Spire, *Lettres inédites*, op.cit., p. 181.

性が増したこと (2) サンドとポリヌに共通の共和主義思想が、ラ・ヌーヴェル・マルセイエーズのプロジェクトを実現可能にさせたこと (3) 実現にまでには到らなかったものの、『魔の沼』や『コンスエロ』とその続編『ルードルシュタッド公爵夫人』が、ポリヌ・ヴィアルド、マイヤベアとリストの三人の音楽家によりオペラ化されるはずであったことなどが明らかとなった。とりわけ、フランスの第二共和制への政治的变化に伴い、文学も芸術も同じように変革をと作家が起こした独自の行動に音楽家が歩み寄り、力を合わせて夢を実現した痕跡をサンドとポリヌの往復書簡に確認できたことは、本稿の成果の一端であったと思われる。

解明できた点は必ずしも多くはないが、ジョルジュ・サンドと知られざる天才女性音楽家ポリヌ・ヴィアルドとの緊密な関係性の立証に若干なりとも寄与できたと思われる⁴³⁾。

サンドとポリヌとルイ・ヴィアルド、およびツルゲーネフが構成していた「文学者の環」に関する考察を今後のテーマとしたい。

43) 紙幅の関係で言及しえなかった多くの点では、筆者作成の「ジョルジュ・サンドとポリヌ・ヴィアルド略歴表」が参考となるだろう (別の機会に発表の予定)。